西周代姓考

谷 秀 樹

はじめに

「姓」は、出土文字資料に依拠すると西周初から本格的に史上に登場しており、本来「周の文化」の属性の1つであったものと見られる。そうして、その使用が拡張した契機としては、周族〈王族＋関中王畿内周系諸族〉の陝東地域への進出とその結果として始まった陝東系諸族と周族との交渉機会の増大が想定される¹⁾。後述するように「姓」は主に婚姻関係器銘に現れており、具体的には陝東系諸族との婚姻関係樹立時に、相互の族的出自を明示することを目的として使用されたものと考えられよう。すなわち、克殷以前に周族間において用いられていた「姓」は別として、克殷後に陝東系諸族が称し始めた「姓」については本来“実親”的内実が伴っていなかったものと判断されるのである。例えば、有力な姓の1つである姜姓を称する族としては、山東地域の齊、冀や河南地域西南部の申、呂、関中王畿西辺の非周系諸族である矢、邕等が挙げられるが²⁾、これら広域に涉って脈絡なく散在する諸族間に同祖・同族的な紐帯を見出すことは困難である。おそらく、そもそもこれら諸族間に実親的な血族関係を想定すること自体に無理があるのであり、むしろこれら諸族は相互に無関係な形で自らが選好する姓を順次選択・導入していったものであろう。また、その際に選択される姓は、今後開始される周王朝との交渉を考慮して、周族によって選好される姓を称する傾向が強かったものと考えられよう。そうして、西周初に姓の使用が普及し始めた後、西周中期以降になると次第に陝東系諸族の発意に掛かる独自の姓の使用例も増加するようになり、「姓」習俗の深化と共に「姓」の多様化も進行したものと見られる。その後は、次第に各姓の始祖伝承説話や系譜関係の系統樹が形成されていき、春秋～戦国期には他の姓との相互関係〈＝親族関係〉をも考慮する形で体系化が進められたものであろう。本稿は、このような姓の史の変遷を再検討する研究の端緒として、その始源である西周期の姓の実態について、同時代史料である金文に依拠してその復元を試みようとするものである。

さて、上記のように姓文化の発達は諸族間の婚姻関係の展開と緊密な関連性があったと見られるのであるが、周王室の婚姻関係について専論した先行研究として劉啓益氏や陳昭容氏等の研究を挙げることが出来る³⁾。ただ、両者とも例えば古文献上でしか登場しない王祁や齊姜を王后として無批判に扱うなど、同時代史料である金文以上に古文献の内容に引き摺られてしまう傾向が見受けられる⁴⁾。これに対し、主に金文のデータに依拠して西周代の姓の問題に取り組まれたのが落合淳思氏である⁵⁾。落合氏は、「姜・妣・姁・妊の四姓が周王やその姫姓有力者と婚姻するというのが本来の姓の形態だった」と指摘され、「西周王朝の中樞は姫・姜・妣・姁・妊の五姓を主として構成されていた」と結論づけられたのである。そうして又、姫姓の増加傾向が著しい理由については、姫姓を自称する勢力の増大を想定されている。姫、姜、妣、姁、妊5姓が西周代において最も重要な姓であったという指摘は氏の卓見であり、本稿においてはまずこの点についての確認作業を進めることになる。ただ、氏は5姓の歴史的消長や相互関係については言及されておらず、また姫姓増加の理

と見られる。また姒姓の事例は〔前期 23 例：中期 9 例：後期 13 例：春秋前期 3 例：春秋後期 1 例：春秋時期 1 例：前期又は中期 1 例：後期又は春秋前期の事例 1 例〕であり、計 52 例である。前期こそ姫姓に匹敵する数値を示していたものの、中期、後期はいずれも 20 例以下の数値で推移し、ついで春秋期に入ると 5 例を割り込み、戦国期以降は衰滅したものと見られる。続いて姞姓は〔前期 6 例：中期 19 例：後期 28 例：春秋前期 3 例：戦国時期 1 例〕であり、計 57 例である。前期は妊姓とほぼ変わらぬ数値であったが、中期から後期にかけては約 3・1 倍、約 4・6 倍と倍増しており、姜姓や姫姓と同様の増加傾向を示している。ところが、春秋前期に入ると 5 例を切り、春秋中期以降はほぼ衰滅していったものと見られるのである。

以上のように、グループ A に属する諸姓はいずれも西周前期より既に 5 例以上の数量で登場しており、グループ B や C に先行する初発的な姓称谓であったものと考えられる。ただ、相互を比較すると、姫姓の事例数が 200 例超えの圧倒的な数値を示し、姜姓の事例がその約半数である 100 例超えの数値に達するのに対し、姒姓及び姞姓は 50～60 例の数値で各々姜姓の約半数、妊姓は 30 例近くで殊に西周中期以降はグループ B と大差ない数量の推移を示していたのである。そうすると、グループ A の中でも格段に見る姓は姫姓と姜姓であったものと判断され、これに対して姒姓は西周代において一貫して一定の数量（10～20 例）を保持し、また妊姓が前期以降に減少化の傾向を辿ったのに対して、姞姓はむしろ増加していったものと見られる。また、グループ A の諸姓はいずれも春秋期に入ると同時に減少傾向に入っており、特に妊、姒、姞の 3 姓は春秋中期以降になると基本的に姿を消している。

第二節 グループ B の事例数

グループ B のうち、嬴姓は〔前期 3 例：中期 7 例：後期 9 例：春秋前期 12 例：春秋中期 2 例：春秋後期 4 例〕であり、計 37 例である（表 2 参照。グループ B の事例は、いずれも同表参照）。次に媯姓は〔前期 1 例：中期 2 例：後期 3 例：春秋前期 7 例：春秋時期 3 例〕であり、計 16 例である。また媯姓は、〔前期 1 例：中期 5 例：後期 4 例：春秋前期 3 例〕であり、計 13 例である。妘姓は、〔前期 2 例：中期 3 例：後期 7 例：春秋前期 1 例〕であり、計 13 例である。次に姚姓は、〔前期 1 例：中期 2 例：後期 4 例〕であり、計 7 例である。以上の諸姓は、いずれも主に中期以降にその姿を現している点で共通しており、春秋期以降に入ると、嬴姓及び媯姓は春秋前期に一時増加傾向を示すものの、いずれも漸次衰滅傾向に入っている（姚姓は春秋期に入る前に消滅）。

続いて、妃姓は〔中期 6 例：後期 10 例：春秋前期 4 例：春秋中期 2 例：春秋後期 1 例：春秋時期 2 例：戦国前期 1 例：戦国中期 1 例：戦国時期 1 例〕であり、計 28 例である。曼姓は、〔中期 1 例：後期 1 例：春秋前期 1 例：春秋中期 1 例：後期又は春秋前期 1 例〕であり、計 5 例である。祁姓は、〔中期 1 例：後期 5 例〕であり、計 6 例である。上記の諸姓は、中期以降に出現しており、いずれも春秋期以降は次第に衰滅している（祁姓は春秋期に入る前に衰滅）。

ついで、牟姓は〔後期 1 例：春秋前期 5 例：春秋中期 5 例：春秋後期 8 例：春秋時期 1 例：戦国前期 1 例〕であり、計 21 例である。妘姓は〔後期 4 例：春秋前期 1 例〕であり、計 5 例である。子姓は〔春秋前期 3 例：春秋中期 1 例：春秋後期 3 例〕であり、計 7 例である。また曹姓は〔春秋前期 4 例〕のみである。これらの諸姓は後期もしくは春秋前期以降に出現しており、前記諸姓と同様に遅くとも戦国前期には衰滅の経過を辿っている。

以上のように、グループ B のうち嬴姓、媯姓、媯姓、妘姓、姚姓は主に西周中期以降、妃姓、曼姓、

祁姓は中期以降、妣姓は後期以降、半姓は主に春秋前期以降、子姓、曹姓は春秋前期以降に現れており、西周代に入ってから順次新たな姓が形成されていた点が推定される⁹⁾。

第三節 グループ C の事例数

西周前期は妣姓 2 例、好姓 2 例、馭姓 1 例で計 5 例、中期は姁姓 1 例、媯姓 1 例、汝姓 1 例の計 3 例、後期は妣姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓各 1 例及び媯姓 3 例の計 11 例、春秋前期は妣姓、嬖姓、嬖姓、嬖姓各 1 例の計 4 例、春秋後期は妣姓、嬖姓、嬖姓各 1 例及び媯姓 2 例の計 5 例である〈表 3 参照〉。いずれも 1～3 例の少数事例しか見出せない諸姓であるが、西周後期に最大数量を示しているという点ではグループ A の姁姓や姜姓、媯姓の動態と類似しており、春秋期以降に衰減していくという点はグループ A 及びグループ B の大勢と共通している。

では次に、各姓の動態の背景について考察を進める前提として、各諸族の姓が何であったのかについて同定する作業を行い、またそれに関連して各族の姻族選択の傾向性についても検討していくことにしたい。

第二章 姓及び姻族の同定

第一節 姁姓諸族の同定及び姻族の同定

姁姓に同定されるのは、前稿の検討結果をふまえると¹⁰⁾、虢、井、畢、毛、散、濂、胙、凡、南、豊、南宮、成、魯、滕、曹、衛、晋、応、蔡、虞、芮、楷、荀、霍等の諸氏・諸侯である。ただ、上記の諸氏・諸侯は姁姓以外の姓を称している場合もあり、それらの異姓称谓例は〈通常、自らの姓以外の姓を称する場合は、姻族の姓であると認めるのが金文の凡例であるので〉当該族の姻族の姓を間接的に示しているものと考えられる。従って、それら他姓の種類を統計的に検討することで、姁姓諸族の姻族選択の傾向を推定することも可能となるであろう。以下、諸氏・諸侯ごとに異姓称谓例及び直接的な通婚事例を取り上げ、上記の点について考察を進めていくことにする。

異姓称谓事例として、虢には「虢孟姫良母」等の例以外に、「虢姜」、「虢妃」、「虢媯」等の用例が見出される¹¹⁾。また井には「井姫」の他「井姜」、「井媯」の例があり¹²⁾、畢には「畢姫」以外に「畢媯」、「畢季媯」の例があり¹³⁾、毛には「毛仲姫」の他に「毛媯」の用例がある¹⁴⁾。また凡には「凡姫」以外に「凡姜」の例があり¹⁵⁾、南には「南姫」以外に「南媯」の例があり¹⁶⁾、豊には「豊姫」以外に「豊媯」や「豊孟媯」、「豊祁」、「豊子」等の用例がある¹⁷⁾。ついで成には「成姫多母」以外に「成姜桓母」、「成媯」等の例があり¹⁸⁾、衛には「衛姫」以外に「衛媯」の例があり¹⁹⁾、晋には「晋姫」以外に「晋姜」、「晋媯」、「晋妃」の例がある²⁰⁾。また応には「応姚」の例があり²¹⁾、蔡には「蔡姫」以外に「蔡媯」、「蔡媯」の例があり²²⁾、芮には「芮姫」の他「芮媯」、「芮媯」の用例があり²³⁾、楷には「楷姫」以外に「楷妊」、「楷媯媯」の例がある²⁴⁾。

次に、直接的な通婚事例について個別に検討していく。毛に関しては、毛伯喙父が仲姚の器を作器している事跡があり、姚姓の族との通婚が推定される²⁵⁾。また散については、散車父が「皇母醒姜」の器を作器し「媯氏」を迎えている点から、姜姓及び媯姓の族との通婚が考えられる²⁶⁾。また南についても、分族と見られる井南伯が鄭季姚好の器を作器している点から、姚姓の鄭氏との婚姻が想定される²⁷⁾。成は成伯孫父が侵嬴の器を作器している点から、嬴姓の族との婚姻が考えられ

る²⁸⁾。魯に関しては、魯侯が姜の器を作器し、魯伯愈父が邾姫仁の媵器を作器している点によると、姜姓の族及び曹姓の邾との婚姻が推定される²⁹⁾。滕については、滕侯夫人として妖がおり、邾伯御戎が滕姫の器を作器している点から見て、妖姓及び邾との婚姻が考えられる³⁰⁾。曹については、曹伯が齊叔姫の媵器を作器している点から姜姓の齊との婚姻が確認される³¹⁾。また、晋については半姓の楚との通婚事例が認められる³²⁾。芮については、芮子仲擲が叔媿の器を作器している点から媿姓の族との通婚が想定され³³⁾、楷については姜氏の器を作器している事例から、姜姓の族との通婚が考えられる³⁴⁾。また荀には荀伯大父が嬴妃の器を作器している例があり、妃姓の嬴氏との婚姻が推定される³⁵⁾。

以上の諸事例をまとめると、姜姓を通婚対象としている姫姓諸氏・諸侯は9例〔婚姻の当事者は虢, 井, 凡, 晋, 散, 成, 魯, 曹, 楷。以下同例〕、媿姓は7例〔虢, 南, 豊, 晋, 蔡, 芮, 散〕、姒姓3例〔衛, 芮, 毛〕、妃姓3例〔虢, 晋, 荀〕、媿姓3例〔畢, 成, 芮〕、姚姓3例〔応, 毛, 南〕、妊姓2例〔楷, 滕〕、妘姓2例〔豊, 蔡〕、曹姓2例〔魯, 滕〕、姁姓1例〔井〕、嬀姓1例〔畢〕、半姓1例〔晋〕、嬴姓1例〔成〕、祁姓1例〔豊〕という集計結果となる。すなわち、この考察によると姫姓諸氏・諸侯にとって特に姜姓及び媿姓が婚姻対象として選好されていた点が窺えるのである。つまり、周王室による姻族諸姓の選好は、王室以外の姫姓諸族〈=本来の周族〉においても一定程度共有されていたものと考えられるのであり、この考察結果は本稿の冒頭で提起していた「姓は本来周の文化の属性の1つであったのではないか」という想定を再確認することにもつながるであろう³⁶⁾。

第二節 非姫姓諸族の同定及び姻族の同定

本稿では、非姫姓諸族のうち、内外諸侯国に相当する異姓諸族のみを取り上げ、主に金文史料によって某姓を称していた点を確認または推定し得るか否かをその同定可否の基準とすることにする。

上記の点を踏まえ、姜姓に同定されるのは齊, 兗, 紀, 許, 申, 呂, 矢, 幽, 賈の諸族であり³⁷⁾、媿姓に同定されるのは鄂, 霸, 楊の諸族³⁸⁾、妊姓に同定されるのは薛, 豊, 弭³⁹⁾、姒姓は杞⁴⁰⁾、妃姓は蘇, 番⁴¹⁾、媿姓は邰, 胡⁴²⁾、嬴姓は黄, 養, 秦⁴³⁾、半姓は楚, 都⁴⁴⁾、嬀姓は陳⁴⁵⁾、曹姓は邾⁴⁶⁾、曼姓は鄧⁴⁷⁾、子姓は宋⁴⁸⁾、妊姓又は姜姓と見られるのが鑄⁴⁹⁾、妊姓又は嬀姓と見られるのが邾⁵⁰⁾、姒姓又は姜姓と見られるのが燕⁵¹⁾の諸族である。ただ、上記の諸族は姫姓諸族の場合と同様に、当該族姓以外の姓を称している場合があり、それらの異姓称谓例は当該族の姻族の姓を間接的に示しているものと考えられる。以下、姫姓の例と同様に、間接的な称谓例及び直接的な通婚事例における称谓例について検索し、非姫姓諸族の姻族選択の傾向について検討を進めていくことにする。

異姓称谓事例として、齊には「齊姜」以外に「齊叔姫」等の用例が見出される⁵²⁾。また許は「許姜」以外に「許姫」の例があり⁵³⁾、矢には「奠姜」〈「奠」は諡称〉以外に「矢姫」の例がある⁵⁴⁾。また幽には「幽姫」の用例があり⁵⁵⁾、鄂には「鄂姜」の用例があり⁵⁶⁾、霸には「霸姫」の用例がある⁵⁷⁾。また杞には「杞姫番」の例があり⁵⁸⁾、邰には「邰姫」や「邰姒」の用例があり⁵⁹⁾、胡には「胡姫」の例がある⁶⁰⁾。楚には「楚叔妊」や「楚嬴」の用例があり⁶¹⁾、邾には「邾曹」以外に「邾姫仁」, 「邾嬴」の用例がある⁶²⁾。鄧には「鄧孟媿」の用例があり⁶³⁾、宋には「宋姫」や「宋姜」の用例がある⁶⁴⁾。

次に、直接的な通婚事例について検討していく。兗及び鄂, 申は周王室と通婚しており⁶⁵⁾、呂については魯侯の父：我が呂姜の器を作器している点から魯との通婚が推定される⁶⁶⁾。また賈につい

ては、賈叔が晋姫の器を作器しており、晋との通婚が想定され⁶⁷⁾、同じく覇に関しては、覇伯が伯姫の器を作器しており、姫姓の族との通婚が考えられる⁶⁸⁾。楊は晋侯と通婚しており⁶⁹⁾、薛については薛仲蓄が仲妊茲母の媵器を作器する際に滕伯同と仲妊茲母を並称している点から滕との通婚が推定される⁷⁰⁾。豊については、周王が豊妊単の器を作器している点から周王室との通婚が想定され⁷¹⁾、杞に関しては魯侯が杞姫番の器を作器しており、また杞伯每刃が邾曹の器を作器している点から、魯や邾との通婚が考えられる⁷²⁾。また、蘇は周王室と通婚しており、蘇公が晋妃の器を作器している点から晋侯との通婚も想定される⁷³⁾。番については、周王が番妃の器を作器している点から王室との通婚が推測され⁷⁴⁾、黄については黄子が黄夫人：孟姫の器を作器し、黄子婁がその妻：叔半母の器を作器している点から、姫姓や半姓の族との通婚が推定される⁷⁵⁾。秦は王室と通婚しており⁷⁶⁾、楚は晋と通婚している⁷⁷⁾。都は叔半と番妃の媵器を作器している点から、半姓の族や番との通婚が想定される⁷⁸⁾。陳は周王室と通婚しており、また陳侯が孟姜媵の媵器を作器している点から、姜姓の族との通婚も考えられる⁷⁹⁾。邾については、邾慶父が州姁車母の器を作器しており、また邾君慶が秦妊（＝邾秦妊）の器を作器している点から、姁姓の州や妊姓の族との通婚が想定され、また山東省棗莊市東江小邾国墓地 M2 で「子皇母」や「魯酉子安母」の作器が出土している点から、子姓の族との通婚も推測される⁸⁰⁾。鄧については、〈鄧〉伯と妣氏が共同で鬲曼臯の器を作器していたと見られる点から、妣姓の族との通婚が推定され、また応曼觚の媵器を作器している点から、応との通婚も想定される⁸¹⁾。鑄については、鑄仲が季姫の器を作器し、また鑄叔が嬴氏の器を作器している点から、姫姓や嬴姓の族との通婚が考えられる⁸²⁾。邾については、邾季が孟姫庶母の器を作器し、また邾仲が孟媵の媵器を作器している点から、姫姓や媵姓の族との通婚が認められる⁸³⁾。燕については、燕侯が姫承の器を作器している点から、姫姓の族との通婚が想定される⁸⁴⁾。

以上の諸事例を総括すると、異姓諸族のうち姫姓諸族を通婚対象としていた族は 28 例、姜姓及び嬴姓の族を通婚対象としていた族は 3 例、妣姓、妊姓及び半姓の諸族を通婚対象としていた族は 2 例、媵、妃、曹、媵、姁、子各姓の諸族を通婚対象としていた族は各 1 例という集計結果となる。すなわち、異姓諸族が選好していた通婚対象の族は、圧倒的に姫姓の諸族であった点が明らかなのである。そうしてこの点は、次の推定が成立する論拠となり得る。すなわち、西周中期から後期にかけて姫姓の事例が増大していった理由が、姫姓の冒姓事例の増加に拠るのではなく、むしろ異姓諸族と姫姓諸族との通婚事例が増大していった結果なのではないか、という推定である⁸⁵⁾。

では次に、章を改めて姫姓諸族及び異姓諸族の通婚事例について具体的に検討していくことにしたい。

第三章 通婚事例の変遷

第一節 姫姓諸族の通婚事例

金文上で、前期における姫姓諸族の婚姻事例として確認されるのは、【陵王＝矢王】間の一例のみである⁸⁶⁾。矢王は前述のように姜姓であり、姫姓の陵から矢に対する通嫁事例であると判断される。陵は溧等の諸族と共に関中王畿北辺の涇河支流域に所在していたものと推定されており⁸⁷⁾、関中王畿西辺の千河下流域に位置した矢と同様に、称王を王朝から黙認されていた古族であったものと考えられる⁸⁸⁾。そうして、矢の称谓例である「矢伯、矢仲、矢叔」等と同様に通常は「陵伯」の称谓を

用いていたものと見られる⁸⁹⁾。従って、本来周族とは別系統の族であり、非周族が姫姓を冒姓した最初期の例ではないかと推定される。黙認称王者同士の交流を示す事例であろう。

ついで中期になると、姫姓諸侯の通婚事例が俄かに増加し始める。姫姓内諸侯による婚姻としては【井＝漁】間、【畢＝邰】間、【畢＝番】間における事例があり⁹⁰⁾、【畢＝邰】間の場合は「畢姫」と共に「畢媿」の称谓例も見出される点から⁹¹⁾、畢と邰双方から通嫁が行われる相互通婚であったものと解釈される。漁は関中王畿の西南辺に位置していた周族とは別系統の古族であり、隳と同様に矢とも交流関係を持っていたものと見られる⁹²⁾。また、邰や番は各々山西省運城市絳県横北村附近及び河南省信陽市平橋区附近に所在した陝東系諸族である⁹³⁾。これ等諸族に対し、井と畢は王朝内でも生え抜きの有力周系大族であり⁹⁴⁾、おそらく、中期における王朝支配体制の動揺（昭王の南征失敗を契機に表面化した王朝秩序の矛盾）をふまえて⁹⁵⁾、王朝の危機打開のための1つの方策として、異姓諸族との融和を図ることを目的に形成された通婚関係であったのではないかと考えられる。また、姫姓外諸侯による婚姻としては、【晋＝格】間、【芮＝邰】間、【応＝鄧】間における事例がある⁹⁶⁾。芮の事例は畢による婚姻関係と重複するものであり、同様の政略的意図に基づく措置であったものであろう。また、晋と応はいずれも西周後期において王朝の軍事行動に参画しており⁹⁷⁾、今回の通婚も王朝の体制保持を目的として、陝東系諸侯との結束を図るための措置であった可能性が高い。応が婚姻対象としている鄧は、前期において王朝による南方疆域巡察の際に関与し、康王代には王朝から特に安撫の対象ともされており⁹⁸⁾、その友好関係を再強化する目的でなされた通婚であったものであろう。

続いて後期に入ると、姫姓諸侯による通婚事例が更に増大する。姫姓内諸侯による婚姻としては、【虢＝蘇】間、【虢＝齊】間、【散＝矢】間における事例等がある⁹⁹⁾。虢は井や畢と同様の有力周系大族であり¹⁰⁰⁾、王朝の方針に基づく政略婚姻であったものと見られる。蘇は宣王初年にも王朝から安撫の対象とされている陝東系の有力族であり、河南王畿に所在したものと見られる¹⁰¹⁾。また齊は後期に入って王朝から幾度も干渉を受けており、山東方面において王朝がその動向を注視する陝東系有力族であった¹⁰²⁾。矢が関中王畿西辺に所在する黙認称王の古族である点は先述した通りである。従って、いずれも王朝の政策的配慮に基づく婚姻であったものと考えられるのである。なお、同時期に毛や井、南等も内諸侯レベルの諸族と通婚しており、或いは同様の意図に係る措置であったものと推定出来よう¹⁰³⁾。また、【鄭＝宋】間の婚姻も、当該期における鄭は内諸侯として理解すべきであると考えられる点から、同様の事例に含めるべきであらう¹⁰⁴⁾。次に、姫姓外諸侯による婚姻としては、【晋＝蘇】間、【晋＝楊】間、【芮＝呂】間、【虞＝胡】間、【成＝許】間、【魯＝杞】間における事例がある¹⁰⁵⁾。【晋＝蘇】間の事例は虢による婚姻関係と重複するものであり、同様の政略的意図に基づく措置であったものであろう。また、晋穆侯は齊と通婚しており¹⁰⁶⁾、これも虢による婚姻関係と重複するため、同様の措置であったものと判断される。また楊は、宣王代に獫狁への対抗を念頭に置いて新封された外諸侯であり¹⁰⁷⁾、楊と同じく山西方面の戎との抗争に追われている晋穆侯が楊と通婚しているのも¹⁰⁸⁾、相互の連携強化を目的とした行動であったものと考えられる。また、呂は当該期に王朝によって河南西部方面の抑えとして新封された申の隣国であり¹⁰⁹⁾、呂と申は共に王朝から称王を黙認されていた可能性がある有力諸侯でもあった¹¹⁰⁾。従って、呂に対する通婚にも王朝の政策的配慮を読み取るべきであると考えられ、中期に邰との通婚にも従事していた芮にその役割を差配したものであろう。また、胡と周王朝との間には王朝成立前後の時期以来の交流関係があり、淮南夷に対する征伐に際しても胡の関与が認められ¹¹¹⁾、中期の鄧と同様に旧交の再強化を

図って通婚関係を樹立したものであろう。また、許及び杞はいずれも河南王畿南辺の陝東系外諸侯であり¹¹²⁾、上記と同様に王朝の政策意図を背景とした融和目的の通婚措置であったものと推察する。特に後者の婚姻当事者である魯に関しては、当該期において王朝による強い干渉が認められ¹¹³⁾、魯を介して杞を抑えようとしたものであろう。杞は当該期において淮南夷勢力と附和して反乱に関与する動きを示しており¹¹⁴⁾、その抑制を意図した措置であったものと考えられる。

ついで春秋前期に入ると、姫姓諸侯による通婚事例が多見する点は西周後期と同様であるものの、その性格が変質し始めている。姫姓内諸侯における通婚としては【虢＝蘇】間、【畢＝陳】間及び【豊＝宋】間における事例が挙げられ¹¹⁵⁾、また姫姓外諸侯による婚姻としては【滕＝邾】間、【滕＝薛】間、【魯＝邾】間、【魯＝厲】間、【曹＝齊】間、【蔡＝宋】間、【晋＝賈】間、【曾＝黄】間における事例が認められる¹¹⁶⁾。虢、畢や豊の婚姻事例は、西周中期以来の政略を継承する施策であったものと推察され、河南王畿内外の有力諸侯である蘇や陳、宋との融和を企図したものと考えられるが、姫姓外諸侯による婚姻事例には王朝の政策との繋がりを格別見出すことが出来ない。むしろ、各姫姓外諸侯は隣国との融和を各々独自の判断で意図し、個別に通婚関係を形成していたものと理解されるのである。

このような傾向は春秋中期以降も継承され、特に長江流域の異姓大国との融和が通婚関係によって図られていたようである。例えば、春秋中期における【晋＝楚】間の事例や春秋後期における【蔡＝呉】間、【蔡＝鄆】間、【曾＝鄆】間、【宋＝呉】間、【隋（曾）＝楚】間の事例等がそれぞれであり¹¹⁷⁾、鄆は楚叔系の国であるため楚の関連事例に含めることが出来るであろう¹¹⁸⁾。〔蔡＝許〕間の事例も楚に対する対応で利害を共有する者同士との連携目的の施策であったと考えることが出来る。

第二節 非姫姓諸族間における通婚事例

非姫姓諸族間における婚姻事例は、西周後期から見出される。例えば、後期における【復＝鄧】間、春秋前期における【楚＝江】間、【楚＝徐】間の事例等がそれに該当し¹¹⁹⁾、姫姓外諸侯の項で先述した個別的な通婚関係の事例に類するであろう。

第三節 王室の通婚事例

周王室による通婚事例に関し、古文献では先周期～周初期における姜姓、任（妊）姓、姒姓諸族との通婚を伝えるが¹²⁰⁾、金文上では前期～中期と後期との間で一つの転機があった点が読み取れる。前期～中期において王と婚姻関係にあったと見られる女子の名称として、姜姓出自者では王姜、仲姜、王嬭姜、王伯姜、季姜を列挙することが出来¹²¹⁾、姒姓出自者では王姒、妊姓出自者では王妊の名が挙げられる¹²²⁾。このうち、王姒を称する者のうちの1人は、金文上で文王と並称されており、文献が伝える太姒に該当するのではないかと見られる¹²³⁾。また、王姒及び王妊の事例が、主に前期に繋げられるのに対して、姜姓出自者の事例は前期～後期にわたって複数確認されており、3姓のうちでも姜姓族が最も姻族として選好されていた点が推測される。また、いずれの女子も国名を冠していないという点は、これらの女子を輩出する姻族がおそらく先周期以来王室と繋がりのある広義の周族に含められる王畿内諸族であったことを示唆しているのではないと思われる。

これら前期～中期を主とする婚姻事例に対し、後期の事例は大きく様相を異にするようになる。例として【王＝異】間、【王＝鄂】間、【王＝魯】間、【王＝蘇】間、【王＝陳】間、【王＝番】間等に見られる事例が挙げられるが¹²⁴⁾、入嫁女子はいずれも国名を冠する陝東系内外諸侯出自の者達であ

る。箕は山東方面において勢威を有する殷代以来の古族であり¹²⁵⁾、また鄂は厲王代頃に河南西南部において広域勢力圏を形成していた周初以来の有力族である¹²⁶⁾。いずれも王朝の対陝東系外諸侯融和政策を反映する政略婚姻であったものと考えられよう。鄂滅亡の直接的契機となった鄂侯馭方の乱は東夷や南夷をも巻き込む大乱であったが¹²⁷⁾、それを鎮圧した後に鄂の故地に新封された申との間にも王室は婚姻関係を形成している¹²⁸⁾。前述のように申は、隣国の呂と共に称王を王朝から黙認されていたと見られる有力族であり、乱を起こす以前の鄂に対する措置と同様の政略婚姻であったものと考えられる。また蘇、陳、番等に対する事例も、陝東系内外諸侯との融和を図るための施策であったものと考えて良いであろう。ついで春秋前期に見られる秦との通婚事例も同様であり¹²⁹⁾、東遷期から春秋初期にかけての混乱期に、旧関中王畿地域を統治下に治めた新興勢力の安撫を図った措置であったものと考えられる。

さて、ここまで論じてきたところにより、西周中～後期に王朝が構想した婚姻関係によるネットワークの全容が明確化する。すなわち、山東方面に対しては【王=箕】間、【虢=齊】間、【晋=齊】間に婚姻関係を樹立して箕及び齊を安撫し、河南王畿方面に対しては【王=蘇】間、【虢=蘇】間、【晋=蘇】間で通婚関係を形成して蘇を取り込む。更に河南王畿以南の河南諸地域及び湖北方面に点在する陝東系外諸侯群に対しては、【成=許】間、【魯=杞】間、【虞=胡】間、【鄭=宋】間、【豊=宋】間、【王=陳】間、【畢=陳】間、【王=番】間、【畢=番】間、【応=鄧】間で婚姻関係を樹立して許、杞、胡、宋、陳、番、鄧の諸国を確実に抑えていく。中でも重要な河南省西南部方面に関しては、まず【王=鄂】間の婚姻を樹立し、鄂滅亡後には【王=申】間、【芮=呂】間で通婚関係を成立させて申、呂との協調関係を確保する。また、山西方面に対しては【畢=邰】間、【芮=邰】間、【晋=楊】間で通婚関係を樹立して邰及び楊と融和し、更に関中王畿西辺方面に対しては【井=獫】間、【散=矢】間で婚姻関係を形成して獫及び矢との提携を強化したのである。

また、このような王室による婚姻政策の転換は、王后の地位の変化をも伴っていたようである。西周前期の王后については、独自に諸臣に賜与を行ったり遣使を行う等の統治行為に携わる例が多見し、時には王朝の軍事行動に参加することもあった¹³⁰⁾。すなわち、いわば“周王の代理者”として行動する事例が見出されるのに対して、中期以降になるとそのような王后の姿は次第に認められなくなっていくのである¹³¹⁾。おそらくこれは、王后の主な出自が周族系から陝東系に移行したことに伴う変化であったものと推察される。中期までの周族系王后の場合は、いわば王族内の準構成員が王后の権能を分有していたに過ぎず、王后の命も王命の範疇に包含し得たのに対して、陝東系諸侯出自となった場合には王室の権能の一部を外諸侯に譲渡することにつながりかねない。そのため、上記のように王后の権限に制限が加えられるようになったものと考えられるのである。

以上のように本章では、まず姫姓及び非姫姓諸族による通婚事例について検討した。その結果、姫姓諸族の通婚事例が西周中期以降に増加傾向を示し始め、後期に事例数がピークに達する点について確認した。そして、そのような事例数増大の背景に、王朝の政策転換が反映していたものと見られる点について指摘したのである。ついで王室の婚姻事例の検討の結果、王室にも同様の傾向が看取され、殊に後期以降には陝東系外諸侯との政略的婚姻事例が増加する点について検証した。この点は先記の「王朝の政策転換の反映」という推定を傍証するものであり、また第二章の末尾において述べた、「西周中期から後期にかけて姫姓の事例が増大していった理由が、異姓諸族と姫姓諸族との通婚事例が増大していった結果なのではないか」という推定の論拠をも提供する考察結果として理解されるであろう。

おわりに

本稿では、金文史料を史料源として主に西周代における姓の実態の解明を試みてきた。まず第一章では各姓の数量的分析を行い、その結果、優位に立つ姓集団がグループ A に属する諸姓であり、就中姫姓及び姜姓が終始圧倒的数値を占めていた点と、殊にその 2 姓及び姁姓が西周前期から後期にかけて増大傾向を示す点について確認した。次に、第二章では諸族と各姓との同定作業及びその作業に基づく各族の姻族の同定作業を行い、その結果、姫姓諸族が選好していた姻族が姜姓や姁姓の諸族であり、これに対して非姫姓諸族が選好していた姻族が姫姓諸族であった点について明らかにした。ついで第三章では、上述した諸姓の増大傾向の背景として王朝の婚姻政策の転換があったのではないかという仮説を提起し、姫姓諸族及び王室の通婚関係について分析を加えた。その結果、西周中後期以降、姫姓諸族及び王室のいずれもが通婚事例を増大させていた点を明らかにし、王室はもとより姫姓諸族の場合も王朝の政策的意図に基づいて姻族選択を行っていた点について検証したのである。要するに、姫姓や姜姓等の主だった姓の事例の増大は、婚姻事例の増大と連関していたのであり、西周代における姓の消長及びその様態は、常に王朝の通婚政策の在り方に左右されていたものと考えられるのである。

【注：西周代姓考】

- 1) 本稿では、関中王畿以東（河南省三門峽市陝県附近以東）の旧殷王朝疆域を中心とする周王朝にとっての新征服地を「陝東」と総称する。
- 2) 姜姓諸族の同定については、本稿第二章：第二節にて後述。
- 3) 劉啓益 1980、陳昭容 2007。
- 4) 昭王の後妃とされる王禛の出典は『国語』周語であり、同じく宣王の後妃とされる齊姜の出典は『列女伝』である。ただ、陳氏は劉氏が提起された理念的な制度である「1 王 1 后」制や「隔代ごとの姜姓入嫁」制を金文史料に基づいて否定されている。
- 5) 落合淳思 2012：第一部：第五章：第三節「西周代の姓」及び第四節「婚姻組織としての姓」。本文引用部分は、同書 125 頁参照。
- 6) 拙稿 2013 参照。
- 7) 曾国の姫姓冒姓については、前掲拙稿 2013 参照。
- 8) 呉鎮烽『集成』〔以下『呉』〕及び『統編』〔以下『呉統』〕については、本稿末尾の【参考文献一覧】参照。上記以外には、『殷周金文集成』、『近出殷周金文集録』、『近出殷周金文集録二編』等の断代案を参考にする（いずれも【参考文献一覧】参照）。
また、本稿で銘文を引用する際には、断代案を〔(1)『呉』又は『呉統』の著録番号、(2)『呉』又は『呉統』の断代案〕の順に付記することにする（『呉統』の場合は「ZO」と表記している。又、『呉』、『呉統』の断代案の西周早期、西周晚期、春秋早期、春秋晚期、戦国早期、戦国晚期を本稿では前期、後期、春秋前期、春秋後期、戦国前期、戦国後期と改めた。なお、それに準じて例えば「西周早前」に繋がられているものについては「前前期」と表記している）。
- 9) 西周代における新たな姓の創出については、前掲落合 2012 も指摘されている〔同書、第一部：第五章：第三節「西周代の姓」〕。
- 10) 拙稿 2015 参照。
- 11) 「甝孟姫良母」〔斉侯匱銘（14982 [後期]）〕、「甝姜」〔甝姜簋銘（4677 [後期]）等〕、「甝妃」〔甝仲鬲銘（2956 [後期]）等〕、「甝姁」〔甝姁鬲銘（2694 [後期]）等〕。なお、[A (+) 伯仲叔季孟 (+) B] の称谓例では、B（斉侯匱銘では「姫」）は当該族の本来の姓もしくは当該族の姻族の姓を指す。称谓例の語構成については、拙稿 2016 参照。B が本来の姓であるのか姻族の姓であるのかの判断は、本来の姓が何であるかを同定することによって確認される。

- 12) 「井姫」〔強鼎銘 (1536 [中期]) 等〕、「井姜」〔井姜大宰已簋銘 (4852 [後期]) 等〕、「井妣」〔伯田父簋銘 (4881 [後期])〕。
- 13) 「畢姫」〔邶伯鼎銘 (1821 [中前期]) 等〕、「畢媿」〔邶仲鼎銘 (1961 [中期])〕、「畢季媿」〔陳侯鬲銘 (2975—2976 [春秋前期])〕。
- 14) 「毛仲姫」〔善夫旅伯鼎銘 (2210 [後期])〕、「毛姁」〔叔休器殘片銘 (19458 [前期])〕。
- 15) 「凡姫」〔伯或父鼎銘 (ZO/231 [中後期])〕、「凡姜」〔伯庶父簋銘 (4904 [後期])〕。
- 16) 「南姫」〔南姫爵銘 (8527—8528 [前期])〕、「南媿」〔南媿鬲銘 (3355 [中前期])〕。
- 17) 「豊姫」〔豊姫鼎銘 (ZO/95 [前期]) 等〕、「豊媿」〔室叔簋銘 (5207 [後期])〕、「豊孟媿」〔輔伯雁父鼎銘 (2082 [後期])〕、「豊祁」〔魯簋銘 (4641 [中期])〕、「豊子」〔宋贛父鬲銘 (2811 [春秋前期])〕。豊には、「豊姫」以外に後掲するように妊姓の族もあり、いずれの用例に含めるべきか確言することは難しい。本稿では、暫定的に「豊媿」,「豊孟媿」,「豊祁」,「豊子」の事例を姫姓の豊の用例に含めておく。なお、尚志儒 1991 は、姫姓の豊と姜姓の豊の併存を説いている。
- 18) 「成姫多母」〔伯多父盥銘 (5591 [後期])〕、「成姜桓母」〔許男鼎銘 (2076 [後期])〕、「成媿」〔甯扶生鼎銘 (2036 [春秋前期])〕。
- 19) 「衛姫」〔鬲寇良父簋銘 (4808 [後期])〕、「衛姁」〔衛姁鬲銘 (2802 [後期]) 等〕。
- 20) 「晋姫」〔晋姫盥銘 (ZO/464 [後期]) 等〕、「晋姜」〔晋姜簋銘 (4233 [中期]) 等〕、「晋媿」〔晋媿盤銘 (14461 [春秋前期]) 等〕、「晋妃」〔蘇公盤銘 (14404 [後期]) 等〕。
- 21) 「応姚」〔応姚鬲銘 (2882 [後期])〕。なお、応が姫姓であることを示す例として、応侯が「姫原母」の器を作器している例〔応侯簋銘 (4711 [後期])〕等がある。
- 22) 「蔡姫」〔盧鐘銘 (15269—15270 [中後期]) 等〕、「蔡媿」〔蔡媿簋銘 (5216 [後期])〕、「蔡媿」〔蔡媿盃銘 (ZO/964 [中前期])〕。
- 23) 「芮姫」〔邶伯簋銘 (ZO/442 [中期]) 等〕、「芮姁」〔芮公叔盤銘 (14514 [中後期])〕、「芮媿」〔芮媿簋銘 (4330 [中後期])〕。
- 24) 「楷姫」〔師趁盥銘 (5622 [中期])〕、「楷妊」〔方簋蓋銘 (5129 [前期]) 等〕、「楷媿媿」〔周棘生簋銘 (4876 [中期])〕。
- 25) 毛伯嘏父簋銘 (4970 [後期])。同様の器銘型式として、例えば王鼎銘 (1520 [中前期]) に「王作仲姜宝鼎」とあり、この場合周王〈姫姓〉と姜姓の族との姻戚関係が想定される。このように特に「媿」字が付加されていなくても通婚関係器である場合もあるため、本稿では類例を通婚事例に含めて例示していくことにする。
- 26) 散車父壺銘 (12404 [中後期])。
- 27) 井南伯簋銘 (5103 [中期])。井南伯は、井地に新分族化した南伯の事例であると考えられる。新分族については、松井嘉徳 2002：第三部：第二章参照。
- 28) 成伯孫父鬲銘 (2933 [後期])。
- 29) 前者については魯侯盃蓋銘 (14724 [前期])、後者については魯伯愈父鬲銘 (2901—2906 [春秋前期]) 参着。ただ、前者の事例のように「(某) 作 (某姓)」の定式をとる器銘に関しては、例えば「王作姜氏尊簋」〔王簋銘 (4289—4290 [中後期])〕とある事例のように (某姓) が異姓を指していると確認出来る場合もある一方で、「王作仲姫宝鼎」〔王鼎銘 (1519 [前前期])〕とある事例のように (某姓) が同姓を指していることもある。従って、ここでは推定の範囲内として指摘しておくにとどめる。
- 30) 前者については滕侯夫人戈銘 (ZO/1199 [春秋後期])、後者については邾伯御戎鼎銘 (2086 [春秋前期]) 参着。
- 31) 曹伯盤銘 (14394 [春秋前期])。
- 32) 晋公盤銘 (ZO/952 [春秋中期]) 及び晋公益銘 (6274 [春秋後期])。益銘の「惟」は晋定公午を指すと考えられるので、晋定公代〈前 511～前 475〉の事跡であると考えられる。そうすると、盤銘の事跡は『左伝』昭公 5 年条〈前 537〉に見える通婚事例に該当する可能性があるだろう。
- 33) 芮子仲擲鼎銘 (2124—2125 [春秋前期])。
- 34) 方簋蓋銘 (5129 [前期])。
- 35) 荀伯大父盥銘 (5606 [後期])。

- 36) 『左伝』では、姜姓諸侯を通婚対象としている姫姓諸侯は5例〔晋〈対象国：斉（莊公28年条等）【以下同例。経文のみに見える例は「経」と付す】、賈（僖公15年条。後述する金文事例により、姜姓に同定される）〕、鄭〈申（隱公元年条）〕、魯〈斉（桓公3年条等）〕、紀（隱公2年条経等）〕、衛〈斉（隱公3年条等）〕、許（閔公2年条）〕、芮（「芮姜」の称谓例（桓公3年条））〕であり、対象国別に見ると8例となる。媯姓は3例〔蔡〈陳（莊公10年条等）〕、鄭〈陳（宣公3年条等）〕、衛〈陳（隱公3年条）〕〕、半姓は3例〔晋〈楚（昭公5年条）〕、蔡〈楚（襄公30年条）〕、衛〈楚（僖公27年条）〕〕、子姓は3例〔鄭〈宋（襄公19年条）〕、魯〈宋（隱公元年条等）〕、衛〈宋（閔公2年条）〕〕、姒姓は2例〔晋〈杞（襄公23年条）〕、魯〈杞（莊公25年条経等）〕〕、媯姓は2例〔晋〈偃（文公6年条）〕、鄭〈南燕（宣公3年条）〕〕、曹姓は2例〔晋〈邾（文公14年条）〕、魯〈邾（文公14年条）〕〕、また嬴姓は1例〔晋〈秦（僖公15年条等）〕、梁（僖公17年条）〕〕であり、対象国別で見ると2例となる。祁姓は1例〔晋〈杜（文公6年条）〕〕、曼姓は1例〔鄭〈鄧（桓公11年条）〕〕、任（妊）姓は1例〔魯〈薛（哀公24年条）〕〕、風姓は1例〔魯〈成（僖公21年条）〕〕、婦姓は1例〔魯〈胡（昭公11年条）〕〕、妃姓は1例〔鄭〈蘇（宣公3年条。後述する金文事例により、妃姓に同定される）〕〕である。姜姓の事例が最も多い点は、金文事例の傾向と一致している。
- 37) 齊姜〔齊姜鼎銘（1615〔中前期〕〕〕、王婦賈孟姜〔賈孟姜匜銘（14929〔後期〕〕〕、紀姜〔紀侯銘子簋蓋銘（4918〔中前期〕〕〕、許季姜〔許季姜簋銘（4724〔後期〕〕〕、申姜〔伯碩父鼎銘（2438〔後期〕〕〕、呂季姜〔呂季姜壺銘（12283〔後期〕〕〕等の例がある。いずれも金文によって「姜姓」を称していた点が確認または推定される事例である。但し、賈以外については他姓と弁別する材料となる金文史料を欠くため、文献での考証を傍証とする。文献を用いた考証については、陳槃1969の該当国条参照。また、矢については姫姓の散氏が「矢姫」の器を作器している一方で〔散伯簋銘（4652—4655〔後期〕〕〕、矢王が奠姜の器を作器している例があり〔矢王簋蓋銘（4823〔中後期〕〕〕、姜姓であったことが推定される。同様に、賈についても賈子叔子犀が子孟姜の媯器を作器している一方で〔賈子叔子犀盤銘（14512〔春秋後期〕〕〕、賈叔が晋姫の器を作器しており〔賈叔鼎銘（ZO/203〔春秋前期〕〕〕、姜姓であったことが推定される。また、鬲については姜氏の器を作器している事例があり〔鬲王鬲銘（2776—2777〔後期〕〕〕、他方で鬲王は矢王等と同様に王朝から称王を黙認された閔中王畿内異姓諸王の一人であったと考えられるので〈黙認される称王者については、拙稿2008参照、前注29）で指摘したように同姓を対象とした作器例であるものと推定する。
- 38) 覇媯〔覇媯鼎銘（1603〔前期〕〕〕、楊媯〔楊媯壺銘（12239—12240〔後期〕〕〕等の例がある。覇については、山西省臨汾市翼城県大河口覇国墓地で東西方向の墓葬や腰坑、殉犬等が検出されており、陝東出自（非姫姓）であったものと推定され、媯姓に同定しておく。次に楊媯壺銘所見の楊媯は、山西省臨汾市曲沃県北趙村晋侯墓地M63の墓主であり、M64の墓主である晋文侯の夫人であったものと見られる。北趙村晋侯墓地の概要については前掲拙稿2015参照。また、鄂については鄂侯が王媯の媯器を作器しているため〔鄂侯簋銘（4828—4831〔後期〕〕〕、媯姓に同定することが出来る。
- 39) 薛については、薛侯が叔妊襄の媯器を作器しており〔薛侯盤銘（14477〔後期〕〕〕、また他方では薛仲菴が仲妊茲母及び姫姓の滕伯同の媯器を作器しており〔薛仲菴簋銘（ZO/503—505〔春秋前期〕〕〕、妊姓であったものと考えられる。豊については、王が豊妊単の器を作器しており〔王盃銘（14762〔後期〕〕〕、妊姓に同定される。弭については、弭叔が犀妊の器を作器している例があり〔弭叔鬲銘（2772—2775〔中後期〕〕〕、妊姓であったものと推定する。
- 40) 杞孟姒〔叔虎父簋銘（5926〔春秋前期〕〕〕の例がある。陳槃1969の杞国条参照。
- 41) 蘇については、蘇公が王妃や晋妃の器を作器している例があり〔蘇公簋銘（4596〔後期〕〕〕、前掲蘇公盤銘〕、妃姓に同定される。また番についても、王が番妃の器を作器しており〔王鬲銘（2870〔後期〕〕〕、同じく妃姓に同定される。
- 42) 匭については、匭伯が畢姫の器を作器している一方で〔前掲匭伯鼎銘〕、匭仲が畢媯の媯器を作器しており〔前掲匭仲鼎銘〕、媯姓であったものと見られる。また胡については、胡叔及び胡姫が伯媯の媯器を作器している例がある〔胡叔胡姫簋銘（5057—5062〔後期〕〕〕。胡の姓に関して文献上では、『左伝』襄公31年に婦姓の胡が見え、また『左伝』哀公8年には姫姓の胡が見えるが、前掲拙稿2015では媯姓と婦姓の胡の併存説の立場をとり、また媯姓の胡が後に姫姓を冒姓したものと推定していた。従って胡叔胡姫簋銘の事跡は、媯姓の胡が姫姓と通婚し、媯姓女子を出嫁した事例であると考えられる。

- 43) 黄については、黄君が季嬴秘の媵器を作器している事例があり〔黄君簋蓋銘（5013〔後期〕〕、嬴姓であったものと見られる。養については、養伯受が元妹である叔嬴為心の媵器を作器しており〔養伯受簋銘（5941〔春秋中期〕〕、また養仲がその孫である叔嬴酖の媵器を作器している事跡もあるため〔養仲盤銘（ZO/943〔春秋前期〕〕、嬴姓であったものと推定される。秦については、秦嬴の称谓例がある〔許子妝簋蓋銘（5962〔春秋後期〕〕。陳槃 1969 の秦国条参照。
- 44) 楚については、楚王が徐季半朔母や隋仲半加、江仲半の媵器を作器している事例があり〔楚王領鬲銘（3358〔春秋前期〕〕、楚王鼎（ZO/210〔春秋中期〕〕、楚王鐘銘（15247〔春秋前期〕〕、半姓であったものと考えられる。また都については、都公が犀仲と仲半義男の器を作器している一方で〔都公簋蓋銘（5895〔春秋前期〕〕、上都公が叔半と番妃の媵器を作器しており〔上都公簋銘（5970〔春秋中期〕〕、半姓であったものと見られる。
- 45) 陳については、王仲嬀嬀母や畢季嬀の用例があり〔陳侯盤銘（14507〔春秋前期〕〕、陳侯鬲銘（2975—2976〔春秋前期〕〕、嬀姓に同定される。
- 46) 邾については、邾友父が胙曹の媵器を作器している例があり〔邾友父鬲銘（2938〔春秋前期〕〕、曹姓であったものと推定する。
- 47) 鄧については、鄧公が応曼酖の媵器を作器しており〔鄧公簋銘（4648—4651〔中期〕〕、曼姓に同定される。
- 48) 宋については、宋公欒が妹である呉の夫人：季子の媵器を作器しており〔宋公欒簋銘（5904〔春秋後期〕〕、季子の入嫁先である呉は姫姓を冒姓していたため、子姓に同定される。呉の冒姓に関連する系譜改編の事跡については、吉本道雅 2005：第 2 部：下篇：第 1 章参照。
- 49) 鑄については、鑄叔が叔妊秦の媵器を作器している一方で〔鑄叔盤銘（14456〔春秋前期〕〕、鑄侯求が季姜の媵器を作器しており〔鑄侯求鐘銘（15178〔春秋前期〕〕、妊姓又は姜姓であったものと見られる。
- 50) 郭については、郭伯が孟妊の器を作器している一方で〔郭伯鼎銘（2194〔春秋前期〕〕、郭仲が孟嬀の媵器を作器しており〔郭仲簋銘（5893—5894〔後期〕〕、妊姓又は嬀姓であったと推定される。
- 51) 燕については、燕侯旨が嬀の器を作器している一方で〔燕侯旨鼎銘（2203〔前期〕〕、燕公が姜乗の器を作器しており〔燕公匜銘（14918〔春秋時期〕〕、嬀姓又は姜姓であった可能性が指摘出来る。
- 52) 齊叔姬盤銘（14485〔後期〕）等。
- 53) 許姬鬲銘（2778〔後期〕）。
- 54) 前掲散伯簋銘。
- 55) 師贖父鼎銘（2140〔中前期〕）。
- 56) 鄂姜簋銘（ZO/479〔後期〕）。
- 57) 氣盤銘（考古学報 2018—2〔中期〕）。
- 58) 魯侯匜銘（14923〔後期〕）。
- 59) 匭姬は芮伯鬲銘（ZO/276〔中後期〕）、匭嬀は虎叔簋銘（4833〔中期〕）に見える。
- 60) 前掲胡叔胡姬簋銘等。
- 61) 楚叔妊は壘伯鼎銘（2356—2357〔春秋前期〕）、楚嬴は楚嬴盤銘（14493〔春秋前期〕）に見える。
- 62) 邾姬仁は魯伯愈父鬲銘（2901—2906〔春秋前期〕）、邾嬴は妊爵銘（8474—8475〔前期〕）に見える。
- 63) 復公子伯舍簋銘（4932—4934〔後期〕）。
- 64) 宋姬は蔡侯鼎銘（2144〔春秋前期〕）、宋姜は宋姜鬲銘（2693〔中期〕）に見える。
- 65) 甯及び鄂については、前掲甯孟姜匜銘及び前掲鄂侯簋銘参照。申と王室との通婚については、『詩』大雅・崧高参照。
- 66) 我簋銘（5321〔中後期〕）。
- 67) 前掲賈叔鼎銘参照。
- 68) 霸伯盤銘（ZO/949〔中期〕）。
- 69) 前注 38) 参照。
- 70) 前掲薛仲蓄簋銘参照。
- 71) 前掲王盃銘参照。
- 72) 前者については、前掲魯侯匜銘参照。後者については、邾伯每刃鼎銘（2061—2062〔春秋前期〕）参照。

- 73) 前者については、前掲蘇公簋銘参照。後者については、前掲蘇公盤銘参照。
- 74) 前掲王鬲銘参照。
- 75) 前者については、黄子鬲銘 (2844 [春秋前期]) 参照。後者については、黄子婁簋銘 (ZO/506 [春秋後期]) 参照。
- 76) 秦子簋蓋銘 (5172 [春秋前期])。
- 77) 前掲晋公盤銘参照。
- 78) 前掲上郡公簋銘参照。
- 79) 前者については、前掲陳侯盤銘参照。後者については、陳侯簋銘 (5939—5940 [春秋前期]) 参照。
- 80) 州妣車母については、邾慶父簋銘 (ZO/388 [春秋前期]) 参照。また秦妊については、邾君慶壺銘 (12333—12337 [春秋前期]) 参照 [邾秦妊鬲銘 (2762—2763 [春秋前期]) では「邾秦妊」と換称されている]。子皇母及び魯西子安母については、子皇母簋銘 (5853 [春秋前期]) 及び魯西子安母簋銘 (5902—5903 [春秋前期]) 参照。
- 81) 伯氏姒氏鼎銘 (2192 [後期又は春秋前期])。銘文の冒頭に「鄧八月」とあり、「伯氏」は鄧伯を指すと推定される。また、鄧公簋蓋銘 (4990 [後期]) でも、鄧公が不故女夫人：姒の器を作器している。応曼鬲については、前掲鄧公簋銘参照。
- 82) 前者については、鑄仲簋銘 (ZO/364 [後期又は春秋前期]) 参照。後者については、鑄叔簋銘 (5883 [春秋前期]) 参照。
- 83) 前者については、邾季鬲銘 (2935 [後期]) 参照。後者については、前掲邾仲簋銘参照。
- 84) 燕侯簋銘 (4440 [前期])。
- 85) 『左伝』では、姫姓諸侯及び王室を通婚対象としている異姓諸侯の例は 22 例【〔齊〈対象：王室 (莊公元年等) 以下同例、衛 (昭公 13 年条等)、蔡 (僖公 4 年条)、魯 (桓公 3 年条等)、鄭 (僖公 17 年条)、密 (僖公 17 年条)、燕 (昭公 7 年条)、胡 (襄公 6 年条)〕、〔陳〈王室 (莊公 18 年条)、蔡 (莊公 10 年条等)、鄭 (宣公 3 年条等)、衛 (隱公 3 年条)〕〕、〔楚〈衛 (僖公 27 年条)、巴 (昭公 13 年条)、蔡 (襄公 30 年条)、晋 (昭公 5 年条)〕〕、〔莒〈呉 (襄公 31 年条)〕〕、〔宋〈王室 (文公 8 年条)、魯 (隱公元年条等)、鄭 (襄公 19 年条)、衛 (閔公 2 年条)〕〕、〔許〈衛 (閔公 2 年条)〕〕〕、嬴姓は 3 例【〔齊〈徐 (僖公 17 年条)、葛 (僖公 17 年条)〕〕、〔楚〈秦 (襄公 12 年条)〕〕〕、曹姓は 2 例【〔齊〈邾 (文公 14 年条)〕〕、〔宋〈小邾 (昭公 25 年条)〕〕〕、姜姓は 2 例【〔莒〈齊 (襄公 31 年条)、向 (隱公 2 年条)〕〕〕、嬀姓は 2 例【〔陳〈息 (莊公 10 年条)〕〕、〔楚〈陳 (莊公 15 年条) [莊公 10 年条の息嬀が楚に再嫁]〕〕〕、子姓は 1 例【〔齊〈宋 (僖公 17 年条)〕〕〕、曼姓は 1 例【〔楚〈鄧 (桓公 13 年条)〕〕〕 という集計結果となる。姫姓の事例が圧倒的に多い点は、金文事例の傾向と一致している。
- 86) 陵王尊銘 (11684 [前前期])。
- 87) 甘肅省平涼市靈台県白草坡遺跡の M1 から「溲伯」銘器が出土し、M2 から「陵伯」銘器が出土した。甘肅 1972 及び甘肅 1977 参照。
- 88) 矢国については、王明珂 1987 参照。王朝が黙認する称王者については、前注 37) 所引拙稿 2008 参照。
- 89) 矢の分族の称谓例については、前掲拙稿 2008 参照。
- 90) 【井=強】間 [前掲強鼎銘]、【畢=棚】間 [前掲棚伯鼎銘]、【畢=番】間 [番伯鬲銘 (ZO/246 [中後期])]。
- 91) 前掲棚仲鼎銘参照。
- 92) 強国については、盧連生・胡智生 1988 参照。強国関連遺跡である陝西省宝鶏市紙坊頭遺跡 M1 から矢伯鬲が出土し、また宝鶏市茹家莊遺跡 M1 からは「矢」字を書いた灰釉豆が出土している。
- 93) 棚国の位置及び西周代における政治的動向については、前掲拙稿 2013 参照。番国の位置及び興亡に関しては、金榮樞 2014 参照。金氏は、西周代の番国が河南王畿に位置していたものと推定されているが、史料の根拠に乏しいと思われる。
- 94) 前掲拙稿 2015 参照。
- 95) 西周中期における王朝体制の動揺については、前掲拙稿 2013 参照。
- 96) 【晋=格】間 [格伯簋銘 (4923 [中期])]、【芮=棚】間 [芮伯獻銘 (ZO/276 [中前期])]、【応=鄧】間 [前掲鄧公簋銘]。

- 97) 前掲拙稿 2013 参照。
- 98) 前掲拙稿 2013 参照。
- 99) 【號=齊】間〔前掲齊侯匜銘〕、【散=矢】間〔前掲散伯簋銘〕。【號=蘇】間に関しては、號姪〔妃〕による作器例がある一方で〔號姪妃盤銘 (14422 [春秋前期])〕、蘇夫人が姪妃襄の媵器を作器している事例があり〔蘇夫人盤銘 (14405 [後期])〕、號姪〔妃〕と姪妃襄は同一人である可能性があるため、当該婚姻事例に含めておくことにする。なお、通婚時期については、本稿では暫く後者の断代に従う。
- 100) 前掲拙稿 2015 参照。
- 101) 宣王 3 年の頌壺銘 (12451—12452 [後期]) で頌は「官嗣成周貯廿家」を命じられており、この事跡は厲王奔彘以降弛緩した陝東支配の再建を企図する試みの一環であったものと見られる〈拙稿 2012 参照〉。その同年同月の器銘であると見られる史頌簋銘 (5259—5267 [後期]) で、史頌は蘇を巡察した上で成周に赴いており、前記の目的と関連する事跡であったものと考えられる。『左伝』隱公 11 年条によると、蘇は黄河以北に温をはじめとする諸邑を有しており、南陽地方に広大な疆域を擁していたものと見られる。
- 102) 前掲拙稿 2013 参照。
- 103) 前掲善夫旅伯鼎銘、莓伯簋銘 (4591 [後期])、嗣馬南叔匜銘 (14950 [後期])。
- 104) 鄭伯匜銘 (14946 [後期])。鄭の初封の地は、関中王畿東端の陝西省華県附近に求められる〈李学勤 1999 参照〉。
- 105) 【晋=蘇】間〔前掲蘇公盤銘〕、【晋=楊】間〔前掲楊姑壺銘〕、【芮=呂】間〔呂王姬壺銘 (12292 [後期])〕、【虞=胡】間〔胡叔簠銘 (5858 [後期])〕、【成=許】間〔前掲許男鼎銘〕、【魯=杞】間〔前掲魯侯匜銘〕。
- 106) 『史記』晋世家：穆侯 4 年条に「取齊女姜氏爲夫人」とある。
- 107) 宣王 42 年の逯鼎一銘 (2501—2502 [後期]) によると、楊侯は封建後間もなく獫狁征伐に従軍しており、当初より獫狁に対抗することを任務としていたものと見られる。
- 108) 晋穆侯と山西方面の諸戎との抗争については、拙稿 2012 参照。
- 109) 申と呂は共に河南省南陽市附近に位置しており、「申呂」と併称されていた。前掲拙稿 2008 参照。
- 110) 申と呂の称王事跡については、前掲拙稿 2008 参照。
- 111) 周王朝創業前後の時期に繋げられる周原甲骨において、既に胡と周政権との交渉が認められる点、及び西周中期の王朝による淮南夷征伐に胡が関与していた点については、前掲拙稿 2013 参照。
- 112) 西周代の許国は河南省許昌市附近、杞国は河南省開封市杞県附近に比定される〈陳槃 1969：該当国条参照〉。いずれも河南王畿南辺の地である。
- 113) 前掲拙稿 2012 参照。
- 114) 史密簋銘 (5327 [中後期]) に「杞夷」という呼称が見え、当該期において杞は淮夷と連帯して反乱に関与していたものと考えられる。
- 115) 【號=蘇】間〔蘇冶妊鼎銘 (2089 [春秋前期])〕、【畢=陳】間〔前掲陳侯鬲銘〕、【豊=宋】間〔前掲宋贄父鬲銘〕。
- 116) 【滕=邾】間〔前掲邾伯御戎鼎銘〕、【滕=薛】間〔前掲薛仲蓄簠銘〕、【魯=邾】間〔前掲魯伯愈父鬲銘〕、【魯=厲】間〔仲伯匜銘 (14993 [春秋前期])〕、【曹=齊】間〔前掲曹伯盤銘〕、【蔡=宋】間〔前掲蔡侯鼎銘〕、【晋=賈】間〔前掲賈叔鼎銘〕、【曾=黄】間〔曾侯簠銘 (5936 [春秋前期])〕。
- 117) 【晋=楚】間〔前掲晋公盤銘〕、【蔡=呉】間〔蔡侯申尊銘 (11815 [春秋後期])〕、【蔡=鄒】間〔蔡侯盤銘 (14519 [春秋後前期])〕、【曾=鄒】間〔曾姬盤銘 (14395 [春秋後期])〕、【宋=呉】間〔前掲宋公欒簠銘〕、【隋(曾)=楚】間〔前掲楚王鼎銘〕。隋(隨)が曾を換称した国名である点については、前掲拙稿 2013 参照。
- 118) 鄒子匜簋銘 (4578 [春秋後前期]) に「楚叔之孫鄒子匜」とある。
- 119) 【復=鄧】間〔前掲復公子伯舍簋銘〕、【楚=江】間〔前掲楚王鐘銘〕、【楚=徐】間〔前掲楚王頤鬲銘〕。なお、『左伝』文公元年条に楚の「江半」の事跡が見える。
- 120) 『史記』周本紀、管蔡世家、晋世家によると、始祖である后稷の母は姜原、古公亶父の妃は太姜、季歴の妃は太任(妊)、文王の妃は太姒、武王の妃は邑姜とされる。『詩』大雅・生民之什に姜嫄が見え、蘇では古公亶父と姜女が併称されている。また、思齊に「思齊大任、文王之母」とあり、周姜及び大姒が列挙

- され、大明に摯仲氏任と王季との婚姻と文王の出生を述べる。なお、『左伝』昭公元年条では邑姜と武王が併称されており、同10年条では「邑姜、晋之妣也」とある。太姒については、定公6年条に「大姒之子、唯周公、康叔爲相睦也」とある。
- 121) 王姜〔小臣伯鼎銘(2205〔前後期〕)等〕、仲姜〔王鼎銘(1520〔中前期〕)、王烱姜〔弑鼎銘(2448〔中前期〕)、王伯姜〔王伯姜鼎銘(2074〔中後期〕)等〕、季姜〔王壺銘(ZO/812〔後期〕)〕〕。
- 122) 王姒〔寓鼎銘(2327〔前前期〕)等〕、王妊〔王妊簋銘(4074〔前後期〕)〕。
- 123) 班簋銘(5401〔中期〕)。班簋銘は中期の器銘であるが、「王姒」は祖考の稱謂として挙げられており、事跡自体は無論前期に繋げられる。「王姒」の銘器は前期から中期にかけての器銘で複数認められるので、幾人かいる王姒のうちの一人が文王妃であったのではないかと推定される。
- 124) 【王=巽】間〔前掲巽孟姜匜銘〕、【王=鄂】間〔前掲鄂侯簋銘〕、【王=魯】間〔遣小子鞞簋銘(4728〔後期〕)〕、【王=蘇】間〔前掲蘇公簋銘〕、【王=陳】間〔前掲陳侯盤銘、陳侯簋銘(4674〔後期〕)〕、【王=番】間〔前掲王鬲銘〕。また金文事例とは別に、文献に見える例として【王=申】間の婚姻事例がある〔前掲『詩』大雅:崧高〕。なお、陳侯盤銘の「王仲嬀嬀母」と陳侯簋銘の「王嬀」が同一人でなかったとすると、【王=陳】間には【王=申】間と同様に連世婚姻関係が成立していた可能性もある〔【王=申】間では、厲王代及び宣王代に申女が通嫁していたものと見られる。前掲拙稿2013参照〕。文献では、『左伝』莊公18年条に【王=陳】間の通婚が見える。
- 125) 巽国は甲骨文にも見え、殷代以来の古族であったものと見られる。巽国と周王朝との交渉については、孔華・杜勇2016参照。
- 126) 鄂国は、西周前期の虎方征伐の際に適省先として見え〔前掲拙稿2012〕、また湖北省随州市安居鎮羊子山では西周前期に繋げられる鄂国関連墓葬が出土している〔随州1984〕。厲王代初年の南国反子の乱平時には、凱旋時の厲王が鄂侯を礼遇しており、既に相当の勢威を有していたものと見られる〔前掲拙稿2013〕。
- 127) 前掲拙稿2012参照。
- 128) 『詩』大雅・崧高参照。
- 129) 秦公鐘銘(15565—15569〔春秋前期〕)。
- 130) 王后による賜与事例としては、王姜の例である前掲小臣伯鼎銘や旗鼎銘(2321〔前期〕)、不寿簋銘(5008〔前期〕)、作冊矢令簋銘(5352—5353〔前期〕)、作冊鬲卣銘(13320〔前期〕)や王烱姜による例である前掲弑鼎銘、王姒の例である前掲寓鼎銘、叔魏尊銘(11741〔前期〕)、保侃母壺銘(12300〔前期〕)等が挙げられる。また、遣使事例としては叔簋銘(5113—5114〔前期])や前掲作冊鬲卣銘、前掲弑鼎銘がある。王后が周王と共に行幸する事例も見出され〔前掲作冊鬲卣銘等〕、周王の親征に帯同されることもあったようである〔前掲作冊矢令簋銘〕。王后からの賜与に対して諸臣は「対揚王姒休」〔前掲寓鼎銘〕というように周王に対するのと同様に“対揚形式”をとっていたようであるが、「揚王休」〔前掲小臣伯鼎銘〕、「用対王休」〔前掲旗鼎銘〕、「対揚王休」〔前掲不寿簋銘〕、「揚皇王壺」〔前掲作冊矢令簋銘〕とある称呼例を参着すると、“周王の代理者”としての性格が明確である。
- 131) 蔡簋銘(5398〔中期])で、周王は蔡に対して「嗣王家外内」を命じているが、その具体的職掌の1つとして「出入姜氏命」が挙げられている。この指示が結果的に王后からの専行的出命を抑止することにつながるものであるとすれば、当該期頃から王后権の抑制が始まっていたものと見ることも出来よう。

凡例

- 断代と器銘番号は『呉』及び『呉統』〔器銘番号の冒頭に「ZO」と表記〕に拠る。なお、両著未収の器銘については出典を注記し、断代は出典の考証に従う。
- 〈器銘番号 [= 器銘番号]〉の表記は、同銘器であることを示す。同銘器は事例数にカウントしない〔同銘器も含めて「1」とカウントする。なお、ほぼ同銘器であるものも同銘器の例に含める〕。
- 殷代に繋がられている例については、当該字句が姓称谓であると断定する根拠に乏しいため、用例から基本的に除外する。

【表1】グループA

姫姓

前期	〈1519〉、〈1698—1699 [= 4464 ^(注1)]〉、〈1719〉、〈1803〉、〈1824—1826〉、〈2733〉、〈2715〉、〈4297—4298〉、〈4559〉、〈4193〉、〈4237〉、〈4440〉、〈8527—8528〉、〈8426〉、〈11684〉、〈13248—13249 [= 11731]〉、〈14685 ^(注2) 〉、〈11791 [= 13313]〉、〈12152〉、〈ZO/95 [= ZO/976 ^(注3)]〉、〈ZO/132〉、〈ZO/153〉
中期	〈1440〉、〈1536 [= 1734, 1736, 2269—2270, 3293, 11685]〉、〈1788〉、〈1821 [= 4499]〉、〈2074〉、〈2140〉、〈2317 [= 3025]〉、〈2475〉、〈2830〉、〈2849—2852〉、〈2854—2857〉、〈2932〉、〈2954〉、〈4130〉、〈4645〉、〈2691〉、〈2716〉、〈4621〉、〈4923〉、〈5003—5006〉、〈2831—2838〉、〈2913〉、〈3294〉、〈3325〉、〈4328〉、〈5205〉、〈4603〉、〈4900〉、〈5093—5094〉、〈5213—5214 [= 5666, ZO/227, ZO/443—444]〉、〈10856〉、〈11811〉、〈5130—5132 ^(注4) [= 12417—12418]〉、〈14419〉、〈14525 [= 14797]〉、〈14528〉、〈5346—5349〉、〈5378 [= 5402 ^(注5)]〉、〈5622〉、〈14873〉、〈15269—15270 [= 15272—15274]〉、〈11421〉、〈11755〉、〈12153〉、〈14723〉、〈ZO/221〉、〈ZO/231〉、〈ZO/246〉、〈ZO/247〉、〈ZO/276 [= ZO/372]〉、〈ZO/434—435〉、〈ZO/441〉、〈ZO/442〉、〈ZO/461〉、〈ZO/924〉、〈ZO/949〉、〈ZO/981〉、〈【考古学報 2018—2】 所載：気盤銘〉
後期	〈1878〉、〈2083〉、〈2106〉、〈2143〉、〈2170 [= 3003, 2995—3004, 14001—14002]〉、〈2173—2174〉、〈2187〉、〈2191〉、〈2196 [= 12370 ^(注6)]〉、〈2210〉、〈2249 [= 4998]〉、〈2303〉、〈2396〉、〈2407〉、〈2935〉、〈2970—2974 [= 2966—2969, 14930, ZO/259]〉、〈3006〉、〈2479〉、〈2482 [= 14537]〉、〈2988—2989 [= 3012]〉、〈4668〉、〈4505—4506〉、〈4591〉、〈4652—4655 [= 14875]〉、〈4656—4657〉、〈4687—4691〉、〈4874—4875 [= 【文物 2017—3】 所載：井公簋銘]〉、〈4775 [= 4903, 12361—12362, 5516—5517]〉、〈4879〉、〈4943〉、〈4727〉、〈5015—5016〉、〈5017—5018〉、〈2735〉、〈2761〉、〈2778〉、〈2790—2791〉、〈2801〉、〈2841—2842〉、〈2891〉、〈2983〉、〈3005〉、〈5057—5062〉、〈5080〉、〈4711 [= 5311]〉、〈4726〉、〈4728〉、〈4751〉、〈4808 [= 12331]〉、〈4827〉、〈4901〉、〈5216〉、〈5585—5586〉、〈6159〉、〈12205〉、〈12348〉、〈14399 [= 14743]〉、〈14447〉、〈14459〉、〈14485〉、〈14853〉、〈14864〉、〈5387—5388〉、〈5512〉、〈5591〉、〈5609〉、〈14887〉、〈14923〉、〈14946〉、〈14950〉、〈14959〉、〈14982〉、〈14983〉、〈5765〉、〈5858〉、〈5889〉、〈15496—15499〉、〈12292〉、〈14862〉、〈14874〉、〈ZO/152〉、〈ZO/154〉、〈ZO/193 [= ZO/418—419]〉、〈ZO/241—242〉、〈ZO/320〉、〈ZO/391〉、〈ZO/464〉、〈ZO/466〉、〈ZO/929〉、〈ZO/935〉、〈ZO/951〉、〈ZO/975〉、〈【考古 2016—7】 所載：姫牛母鼎銘〉
春秋前期	〈1465〉、〈2059 [= 5852]〉、〈2086〉、〈2144〉、〈2356—2357 [= ZO/509]〉、〈2358〉、〈2825〉、〈2844 [= 13997—13998, 14455, 14942, 19232, 19302]〉、〈4862〉、〈4863〉、〈4919〉、〈2824〉、〈2901—2906 [= 14448—14450 ^(注7) , 14932, 5860—5862]〉、〈2927〉、〈2936—2937〉、〈5172〉、〈5876—5877〉、〈5955〉、〈14394 [= 14876]〉、〈14413 [= 14417]〉、〈14416〉、〈14444〉、〈14474〉、〈14489〉、〈14993〉、〈5800〉、〈5936〉、〈15565—15569〉、〈19231〉、〈ZO/135 [= ZO/823]〉、〈ZO/164〉、〈ZO/203 [= ZO/432]〉、〈ZO/215〉、〈ZO/539〉、〈ZO/838 [= ZO/947]〉、〈【江漢考古 2016—5】 所載：矢叔匜銘〉
春秋中期	〈14499〉、〈14463 [= 14944]〉、〈15002〉、〈ZO/952〉
春秋後期	〈2372〉、〈5803〉、〈6054〉、〈11815 [= 14078, 14535, 5933—5934, 11721]〉、〈12190〉、〈14083—14084〉、〈14511 [= ZO/997]〉、〈14519 [= 14996]〉、〈14964〉、〈5794〉、〈5892〉、〈15003〉、〈15066—15067 [= 15369—15414]〉、〈6073〉、〈14395〉、〈14491〉、〈ZO/1290〉

春秋時期	〈14457〉、〈5929 [= 14486] ^(註8) 、〈5554〉
戦国前期	〈4811〉
戦国中期	〈12424—12425 [= ZO/150]〉
戦国後期	〈15065〉
戦国時期	〈14075〉
後期又は 春秋前期	〈ZO/364〉

姜姓

前期	〈2205〉、〈2321〉、〈3954〉、〈4075〉、〈4207〉、〈5113—5114〉、〈4658〉、〈5008〉、〈5129〉、〈10585〉、〈13296—13297〉、〈5352—5353〉、〈13320〉、〈14724〉
中期	〈1439〉、〈1520〉、〈1548〉、〈1615〉、〈1828—1829〉、〈1907〉、〈1959〉、〈2074〉、〈2206〉、〈2830〉、〈2445〉、〈2448〉、〈2496〉、〈2693〉、〈4452〉、〈4778〉、〈2814—2816 [= 12278—12279]〉、〈2858〉、〈4233〉、〈4289—4290〉、〈5205〉、〈4673〉、〈4823〉、〈4918〉、〈5024〉、〈5154—5155〉、〈5321〉、〈5376—5377〉、〈12017〉、〈12404 [= 12359]〉、〈14436 [= 14760]〉、〈5304〉、〈5398〉、〈ZO/348〉、〈ZO/434—435〉
後期	〈1839 ^(註9) [= 1972, 3301, 4498, 6128, 5198, 12223]〉、〈2076〉、〈2438〉、〈3014〉、〈2718〉、〈2719〉、〈4779—4780 [= 2900]〉、〈4883—4886〉、〈4904〉、〈4724〉、〈4968〉、〈5000—5002〉、〈2776—2777〉、〈2778〉、〈2803〉、〈2804 [= 3323]〉、〈2871—2872〉、〈2874〉、〈2925〉、〈4376〉、〈5095〉、〈4677〉、〈4801〉、〈4852〉、〈4939〉、〈5120〉、〈5612〉、〈5867〉、〈6119—6120〉、〈11816—11817〉、〈12242—12243〉、〈12259〉、〈12282〉、〈12283—12284 [= ZO/401]〉、〈12344—12345〉、〈14008 [= 14891]〉、〈5341〉、〈5627〉、〈14889〉、〈14890〉、〈14929〉、〈14914〉、〈15297 ^(註10) 〉、〈ZO/169〉、〈ZO/479〉、〈ZO/537〉、〈ZO/812〉、〈ZO/986〉
春秋前期	〈1835—1838 [= 3300, 4532—4535, 12247—12248]〉、〈2863—2865〉、〈2491〉、〈4861〉、〈12407〉、〈14407 [= 14896]〉、〈14513〉、〈14966〉、〈5939—5940〉、〈15178〉、〈6224〉、〈ZO/183 [= ZO/412—415, ZO/992]〉、〈ZO/451—452〉、〈ZO/830〉
春秋中期	〈15828〉、〈14526〉、〈ZO/510—511〉
春秋後期	〈2363 [= 14518, 14997, 6076]〉、〈12423〉、〈12449—12450〉、〈14512〉、〈5897〉、〈5962〉、〈14998〉、〈6225 [= ZO/260—261]〉
春秋時期	〈14987〉、〈14918〉
戦国前期	〈5977—5978〉、〈19237〉

妊姓

前期	〈1523〉、〈4074〉、〈4153〉、〈4239—4240〉、〈5129〉、〈8474—8475〉、〈12149—12150〉、〈ZO/112 ^(註11) 〉
中期	〈2405〉、〈2692 ^(註12) 〉、〈2772—2775〉、〈5307〉、〈ZO/789〉
後期	〈4790—4791〉、〈3256〉、〈4685〉、〈5118〉、〈14477 [= 14974]〉、〈14762〉
春秋前期	〈1947—1948 [= 2782, 2866—2868, 5878—5879, 14905, 12333—12337, 12352, 14414, 14955, ZO/985]〉、〈2089 [= 14454]〉、〈2194〉、〈2356—2357 [= ZO/509]〉、〈2825〉、〈2762—2763〉、〈14456〉、〈5905〉、〈ZO/499 [= ZO/503—505]〉
春秋時期	〈19019〉

姒姓

前期	〈1591〉、〈1650〉、〈1721〉、〈1925—1926 [= 9852]〉、〈2203〉、〈2327〉、〈2734 ^(註13) [= 4324]〉、〈4178〉、〈3275〉、〈2869〉、〈3221〉、〈4198—4199〉、〈4325—4326〉、〈4327〉、〈4412〉、〈4454〉、〈5049〉、〈11741 [= 13533]〉、〈19458〉、〈11649〉、〈12300〉、〈13088〉、〈ZO/792 [= ZO/881]〉
中期	〈2104〉、〈2496〉、〈2722〉、〈4323〉、〈4833〉、〈4772〉、〈13830〉、〈14514〉、〈5401〉
後期	〈2188〉、〈2374—2375〉、〈2492—2494 [= 12451—12452, 14540, 5390—5397]〉、〈2724〉、〈4792—4799〉、〈2802 [= 6121—6122]〉、〈4675—4676〉、〈4990〉、〈12432 [= 14774]〉、〈5837〉、〈6228〉、〈ZO/382—383 [= ZO/401]〉、〈ZO/430—431〉
春秋前期	〈2126〉、〈2944〉、〈5926〉

春秋後期	〈2404〉
春秋時期	〈14498〉
前期又は 中期	〈【考古 2016—7】 所載：昔雞簋銘 [积文例：黄益飛 2018] 〉
後期又は 春秋前期	〈2192〉

媾姓^(注14)

前期	〈1603 [= 4329]〉、〈1795〉、〈4152〉、〈11789 [= 13311]〉、〈10484〉、〈10584〉
中期	〈1740〉、〈1903 [= 3317, 12257, 14418]〉、〈2297—2300 [= 4838—4842]〉、〈3355〉、〈4456〉、〈3035〉、〈3039—3040〉、〈4330〉、〈4620〉、〈4696〉、〈4809—4810〉、〈12172〉、〈12404〉、〈14783〉、〈5320〉、〈5602—5604〉、〈11792 [= 13314]〉、〈ZO/244〉、〈ZO/455〉
後期	〈1833〉、〈2211〉、〈2752 [= 2746]〉、〈3008—3010〉、〈3335〉、〈2694〉、〈2723〉、〈4570—4571〉、〈4753—4756〉、〈2739—2740〉、〈2779〉、〈3007〉、〈3320〉、〈4828—4831〉、〈4873〉、〈4969〉、〈5158—5159〉、〈5207〉、〈5216〉、〈5670〉、〈5655〉、〈12280〉、〈14386 [= 14861]〉、〈5505〉、〈5550〉、〈14948〉、〈5683〉、〈12239—12240〉
春秋前期	〈2929〉、〈4712—4713〉、〈14461 [= 14954]〉
戦国時期	〈6152〉

【表 2】グループ B

嬴姓^(注15)

前期	〈1622 ^(注16) [= 14392, 14738]〉、〈8474—8475〉、〈8513〉
中期	〈1434〉、〈1607〉、〈2379〉、〈14428〉、〈14764〉、〈13337—13338〉、〈14380〉
後期	〈1971 [= 2873]〉、〈2142〉、〈5013〉、〈2743〉、〈2933〉、〈14492〉、〈14886 [= 14877 ^(注17)]〉、〈ZO/428—429〉、〈ZO/900〉
春秋前期	〈1743 [= 2889—2890, 12296, 14408]〉、〈2088〉、〈2095 ^(注18) [= 5883]〉、〈2237—2238〉、〈3023—3024〉、〈5834〉、〈14520〉、〈6263〉、〈14493 [= 14979]〉、〈ZO/200〉、〈ZO/485 [= ZO/817]〉、〈ZO/943 [= ZO/994]〉
春秋中期	〈14086〉、〈5941〉
春秋後期	〈2425〉、〈5932 [= 6270 ^(注19)]〉、〈5962〉、〈15987〉

媯姓

前期	〈1986〉
中期	〈12151〉、〈ZO/214〉
後期	〈4674〉、〈5893—5894〉、〈14458〉
春秋前期	〈2212〉、〈2975—2976〉、〈14507 [= 5937—5938]〉、〈14994〉、〈5947—5949〉、〈12294—12295〉、〈ZO/194〉
春秋時期	〈6072〉、〈5554〉、〈14967〉

媯姓

前期	〈3292 [= 4352, ZO/365—367, ZO/781, ZO/815, ZO/871—872]〉
中期	〈1961〉、〈2849—2852〉、〈4556—4557〉、〈4764—4767 [= 14452, 14767, 14934 ^(注20)]〉、〈ZO/463〉
後期	〈1916〉、〈4932—4934〉、〈5057—5062〉、〈ZO/370〉
春秋前期	〈2009 [= 12353, 14768]〉、〈2036〉、〈2124—2125〉

妘姓

前期	〈2411〉、〈ZO/82 [= ZO/327]〉
中期	〈1988〉、〈4876 [= 14464]〉、〈ZO/964〉
後期	〈2056〉、〈2082〉、〈2111 [= 2380, 5144—5146, 14523, 14921]〉、〈2859〉、〈5886—5888〉、〈14775〉、〈5667—5669〉
春秋前期	〈14995〉

姚姓 (注21)

前期	〈4954〉
中期	〈1415〉、〈5103〉
後期	〈2294〉、〈2882 [= 5102、14471、ZO/253]〉、〈4970〉、〈5054—5056〉

妃姓

中期	〈4593—4594〉、〈4706〉、〈12416〉、〈14372〉、〈5314〉、〈ZO/91〉
後期	〈1870—1873〉、〈2207—2209 [= 2987]〉、〈2870〉、〈2956 [= 5577—5578]〉、〈2985—2986〉、〈4596〉、〈14404 [= 14892]〉、〈5606〉、〈14405 [= 14893]〉、〈14906〉
春秋前期	〈2089 [= 14454]〉、〈14467〉、〈14980〉、〈14422〉
春秋中期	〈5927—5928〉 〈5970〉
春秋後期	〈5149〉
春秋時期	〈12367〉、〈14522 [= 15001] (注22)〉
戦国前期	〈2311〉
戦国中期	〈5141 [= 6077—6078]〉
戦国時期	〈5885〉

曼姓

中期	〈4648—4651〉
後期	〈12304〉
春秋前期	〈2005—2006〉
春秋中期	〈14494〉
後期又は 春秋前期	〈2192〉

祁姓

中期	〈4641〉
後期	〈2955〉、〈2957—2965〉、〈2860〉、〈6147〉、〈6143〉

半姓

後期	〈2839〉
春秋前期	〈3358〉、〈14465〉、〈5895〉、〈5936〉、〈15247〉
春秋中期	〈2318 (注23) [= ZO/210]〉、〈5970〉、〈5973〉、〈ZO/188〉、〈ZO/375〉
春秋後期	〈1848〉、〈2319〉、〈5795〉、〈6068〉、〈5960〉、〈6071〉、〈ZO/481〉、〈ZO/506 [= ZO/523、ZO/906、ZO/973]〉
春秋時期	〈6264〉
戦国前期	〈2240〉

妣姓

後期	〈5133〉、〈4802〉、〈5161—5165〉、〈14949〉
春秋前期	〈5832〉

子姓

春秋前期	〈2811〉、〈5853〉、〈5902—5903〉
春秋中期	〈ZO/207〉
春秋後期	〈5904〉、〈6157〉、〈ZO/209 [= ZO/531—532]〉

曹姓

春秋前期	〈1938—1942〉、〈2061—2062 [= 2213、4854—4860、6265、12379—12380、14943、ZO/177、ZO/836]〉、〈2938 [= 2939—2943、ZO/258]〉、〈ZO/158〉
------	--

【表3】グループC

前期	〔妣：〈2786、4520〉〕、〔好：〈5014、ZO/536〉〕〔駁：〈2730〉〕
----	---

中期	[姁：〈1831〉]、[媪：〈ZO/214〉]、[汝：〈ZO/381〉]
後期	[妣：〈2914—2923〉]、[妣：〈2911—2912〉]、[嬖：〈2058〉]、[嬖：〈2108 [=2794—2796]〉]、[嬖：〈5064—5065〉]、[妣：〈4881〉]、[嬖：〈4843〉]、[嬖：〈5506〉] [媪：〈4834—4836、4901、14532—14533〉]
春秋前期	[妣：〈2813〉]、[媪：〈2280—2286 [=5037—5048、14497]〉]、[媪：〈14468 [=14961]〉]、[妣：〈ZO/388〉]
春秋後期	[妣：〈ZO/1199〉]、[嬖：〈2425〉]、[嬖：〈5105〉]、[媪：〈ZO/478、ZO/948〉]

- (注1) 〈4464〉は「中期」に繋がられているが、これは器銘〔柄季簋銘〕の断代であり、蓋銘は南宮姫鼎銘(1698—1699 [前期])の同銘器であると見られるので、「前期」に比定しておく。
- (注2) 〈14685〉は「殷後期」に繋がられているが、器銘に「南姫作彝」とあり、南氏の作器例であると考えられるので、「前期」に比定しておく。
- (注3) 〈ZO/95〉は「前期」に繋がられているが、ほぼ同銘器である〈ZO/976〉は「中期(中前)」に繋がられている。本稿では、暫く前者の断代に従う。
- (注4) 〈5130—5132〉は「後期」に繋がられているが、同銘器である〈12417—12418〉は「中期」に繋がられている。本稿では、暫く後者の断代に従う。
- (注5) 〈5402〉は「後期」に繋がられているが、ほぼ同銘の〈5378〉は「中期」に繋がられている。本稿では、暫く後者の断代に従う。
- (注6) 〈2196〉は「後期」に繋がられているが、同銘器である〈12370〉は「春秋前期」に繋がられている。本稿では、暫く前者の断代に従う。
- (注7) 〈14448—14450〉は「後期又は春秋前期」に繋がられているが、同銘器である〈2901—2906〉が「春秋前期」に繋がられているので、「春秋前期」に比定しておく。
- (注8) 〈5929〉は「春秋後期」に繋がられているが、同銘器である〈14486〉は「春秋前期」に繋がられているので、本稿では暫く「春秋時期」としておく。
- (注9) 〈1839〉、〈3301〉、〈12223〉は「春秋前期」に繋がられているが、同銘器である〈1972〉、〈4498〉、〈6128〉、〈5198〉は「後期」に繋がられている。本稿では、暫く後者の断代に従う。
- (注10) 〈15297〉の姫は姓称ではなく氏称であると考えられるので、姜姓の用例に含めておく。
- (注11) ZO/112は「商後期」に繋がられているが、周的称謂である伯仲叔季孟称謂(「孟恒父」)が見え、また召陳村周原遺址の墓葬出土でもあるため、「前期」に比定しておく。
- (注12) 〈2692〉の姫は姓称ではなく氏称であると考えられるので、妊姓の用例に含めておく。
- (注13) 〈2734〉は「中期」に比定されているが、同銘器である〈4324〉は前期に比定されている。本稿では、暫く後者の断代に従う。
- (注14) 〈4368〉の姁は姓称ではなく氏称であると考えられるので、用例から除外する。
- (注15) 〈5606〉の嬴は姓称ではなく氏称であると考えられるので、用例から除外する。嬴季簋銘(4307 [前期])の「嬴季」の「嬴」も同様である。
- (注16) 〈1622〉は「前期」に繋がられているが、同銘器と見られる〈14392〉、〈14738〉は「中期」に繋がられている。本稿では、暫く前者の断代に従う。
- (注17) 〈14877〉は「春秋前期」に繋がられているが、字様が近似して同銘器であると見られる〈14886〉の断代に従い、本稿では「後期」に比定しておく。
- (注18) 〈2095〉は「春秋時期」に繋がられているが、同銘器である〈5883〉が「春秋前期」に繋がられているため、「春秋前期」に比定しておく。
- (注19) 〈6270〉は「春秋時期」に繋がられているが、呉氏の字積に従うなら「春秋後期」に比定されている〈5932〉と同銘器であると考えられるので、「春秋後期」に断代しておく。
- (注20) 〈4764—4767〉及び〈14767〉は「中期」に比定されているが、〈14452〉及び〈14934〉は「後期」に比定されている。本稿では、暫らく前者に従い「中期」に比定しておくことにする。
- (注21) 姚季鼎(ZO/135 [春秋前期] [=ZO/823 [同上]])の姚は姓称ではなく氏称であると考えられるので、用例から除外する。
- (注22) 〈15001〉は「春秋後期」に繋がられているが、同銘器である〈14522〉は「春秋前期」に比定されてい

るので、本稿では暫く「春秋時期」としておく。なお、(ZO/944 [後期])に「妃子季父其」とある「妃」字は写真不鮮明であり、用例から除外する。仮に「妃」字であるとしても、氏称の例であると見られる。

(注23) 〈2318〉は「春秋後期」に比定されているが、同銘器の〈ZO/210〉は「春秋中期」に比定されている。本稿では、暫く後者の断代に従う。なお、〈ZO/188〉の字积困難な字句について呉氏は「隋」字である可能性を指摘されており、そうすると当該器銘も〈2318〉の同銘器である可能性がある。

【参考文献一覧：西周代姓考】

【金文銘・青銅彝器図像著録】〈及び略称〉

呉鎮烽『商周青銅器銘文暨図像集成』（上海古籍出版社、2012）《略称：『呉』》

同上『商周青銅器銘文暨図像集成続編』（上海古籍出版社、2016）《略称：『呉続』》

中国社会科学院考古研究所『殷周金文集成』（中華書局、1984～1994）

劉雨、盧岩編『近出殷周金文集録』（中華書局、2002）

劉雨、嚴志斌編『近出殷周金文集録二編』（中華書局、2010）

【論考：中文】

袁広闊・崔宗亮「首都師範大学歴史博物館蔵刑公簋」（文物 2017—3）

王明珂「西周矢国考」（大陸雜誌 75—2、1987）

甘肅省博物館文物組「靈台白草坡西周墓」（文物 1972—12）

甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」（考古學報 1977—2）

金栄権「周代番国青銅器及其歴史地理論考」（華夏考古 2014—2）

孔華・杜勇「冥国地望新探」（中国国家博物館館刊 2016—1）

黄益飛「略論昔雞簋銘文」（中国国家博物館館刊 2018—3）

周原考古隊「陝西宝鶏市周原遺址 2014～2015 年の勘探与発掘」（考古 2016—7）

尚志儒「西周金文中的豊国」（文博 1991—4）

随州市博物館「湖北随県発現商周青銅器」（考古 1984—6）

陳昭容「從青銅器銘文看兩周王室婚姻關係」〔陳昭容主編『古文字與古代史』（中央研究院歷史語言研究所、2007）〕

陳槃『春秋大事表列国爵姓及存滅表誤異』（中央研究院歷史語言研究所專刊、1969）《三訂本（1988）》

武漢大学歴史学院・湖北省文物考古研究所・湖北荊州文物保護中心・襄陽市博物館考古隊「湖北襄陽郭家廟墓地曹門湾墓区（2015）M43 発掘簡報」（江漢考古 2016—5）

李学勤「論西周鄭的地望」〔同氏『夏商周年代学札記』（遼寧大学出版社、1999）所収〕

劉啓益「西周金文中所見的周王后妃」（考古与文物、1980—4）

盧連生・胡智生『宝鶏漁国墓地』（文物出版社、1988）

【論考：日文】

落合淳思『殷代史研究』（朋友書店、2012）

谷秀樹「西周代天子考」（立命館文学 608、2008）

同上「西周代陝東戰略考」（立命館文学 626、2012）

同上「西周代陝東系外諸侯婦順考」（立命館文学 631、2013）

同上「西周代姬姓諸侯考」（立命館文学 642、2015）

同上「西周代伯仲叔季孟考」（立命館大学 647、2016）

松井嘉徳『周代国制の研究』（汲古書院、2002）

吉本道雅「西周紀年考」（立命館文学 586、2004）

同上『中国先秦史の研究』（京都大学出版会、2005）

（本学文学部非常勤講師）